

あすとろ通信☆彡

岡山アストロクラブ会報　第 18 号

2013 年 2 月

■活動状況

イベント

▼定例観望会

・2012/12/15
赤磐市赤坂ファミリー公園で予定されていた観望会は、天候不順のため中止となりました。

・2013/1/12
場所：吉備中央町かもがわスポーツパーク
参加者：会員 18 名、一般 2 名の合計 20 名。
最初は雲がちだったものの、途中から回復し、朝まで厳冬期の星空を楽しむことが出来ました。



・2013/2/16
美作市大芦高原で予定されていた観望会は、天候不順のため中止となりました。

▼観望会以外のイベント

・2013/2/2
名称：新年会
場所：AGURAダイニング
会員 24 名参加



・2013/2/2
名称：太陽の丘公園天体観望会（支援）
場所：太陽の丘公園
会員 7 名参加



統計情報

過去 3 ヶ月（2012/11 ～ 2013/1）の件数等の報告

▼ホームページ
・サイト全体の Page View　17,910 PV
※対前四半期比で約 20% 減

▼問い合わせ・入会等
・13 件　※ HP フォームからのもの

▼メーリングリスト利用状況
・688 件
※対前四半期比約 5% 減

▼会員数
前四半期中に正会員 1 名、準会員 6 名増があり、2013 年 1 月末時点の会員数は、正会員 29 名、準会員 39 名の合計 68 名となりました。

会員有志協賛による
大宇宙パノラマ展

倉敷市児島市民交流センター内にて、約 20 点あまりの天体写真が 3 月中旬まで展示されています。

■連載記事

天体ガイド

第7回　弥生の彼方に何を望む…

「枕草子」に出てくる「星は　すばる。ひこぼし。ゆふづつ。よばひ星、すこしをかし。」という一文がある。
現代語訳すると、「星といえば、すばる。彦星（アルタイル）。宵の明星（金星）。流れ星（彗星？）もそれなりに趣きがあって良い。」となる。

平安時代の日本人は、現代では不可能な真っ暗な夜空のもと、たくさんの輝く星空を眺めながら、美しい文章を作っていたんだなぁ～と感心するとともに当時の星空環境を羨ましく思う。

さて、ここから枕草子の中にも歌われているよばひ星＝彗星に少し注目してみようかと思う。

彗星といえば、まず誰もが頭の中で思いつくハレー彗星が一番有名ではなかろうか？ハレー彗星の歴史は

近々のクラブイベント

3月16日（土）　定例観望会
総社市 備中国分寺 北駐車場
月齢 4.3　22:35 入

4月6日（土）　定例観望会
赤磐市是里農村公園
月齢 25.3　2:57 出

5月11日（土）　定例観望会
美作市 大芦高原
月齢 1.1　20:04 入

※開催場所など変更になる場合があります。詳細はホームページトピックスにて開催日近くにご確認ください。

古く、平安時代（837 年、承和三年）に地球に近づき、また最近では 1986 年にも近づき 75 年ごとに世間を賑わせている。また他には、ヘールホップ彗星や日本人が発見した百武すい星など大きな尻尾をひいた姿はとても印象的で、私を含め私たちの中でも暗い空の中実際に眼で見て感動を覚えた人も OAC のメンバーでは多々いるのではないでしょうか？

ということで、少し前置きが長くなりましたが、今月の天体ガイドとしてまず2013年の天文イベントとしてもすでに盛り上がってきている「彗星」に注目してみようと思います。

○「パンスターズ彗星（C/2011 L4)」

2013 年 3 月に 0 等（予想）の大彗星として期待されている彗星です。

2012 年の秋に、10.1 等まで増光した(10 月 14 日、Marco Goiato)。当初の予想より速いペースで増光しているので、今後に期待したいと言いたいところですが、残念ながら天文雑誌やインターネットなどからは南半球からの1月情報からは、増光ペースが鈍くなっている情報もちらほら‥‥ただし、彗星は「水もの」と言われるように、太陽に近づいてコアが分裂し予想よりも急激に増光したパターンも過去にはたくさんありますので、果たしてどうなるとでしょう？？

ちなみここだけの話、彗星はよく発見者が彗星の名前になっているのですが、パンスターズ彗星は、ハワイのハレアカラ山にある望遠鏡で継続的に全天をサーベイ観測し移動天体や突発天体を検出する過程で発見された彗星であり、今回は人の名前ではないのです。また、最新のテクノロジーで19等級から発見されており、近い将来、個人で双眼鏡で夜空を眺めて星や彗星を発見することも難しくなってくるのかと思うと、ロマンあふれる天文の世界に対し少しさみしい感じを覚えます。

さて、パンスターズ彗星の高度変化と離角を表してみました。予報では3月に明るくなるということですが、ピーク時、日本から見える時間帯は夕方もしくは明け方になってしまうため、薄明の中での天体探しに慣れるためにも？彗星ではなく水星探しでもしながら待ちたいところですね。

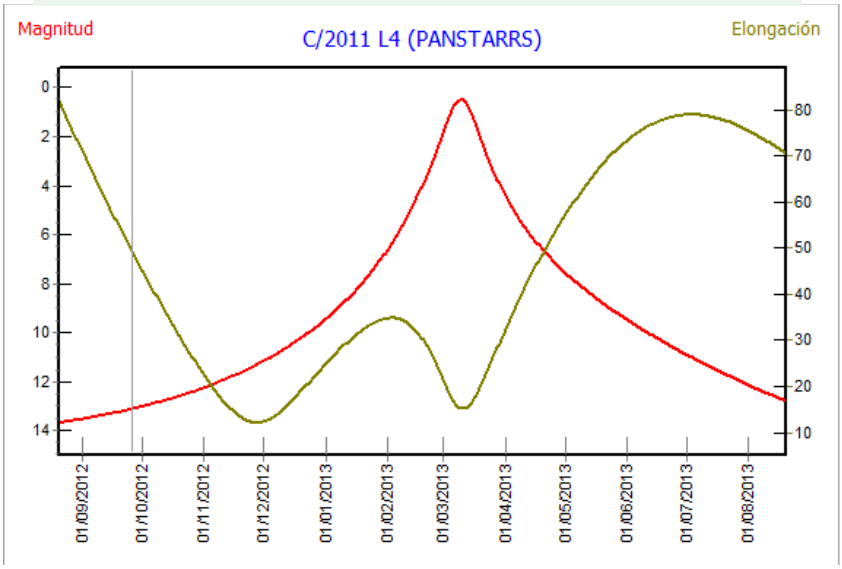
他には、レモン彗星（C/2012 F6)という彗星が同時期に近日点を通過しますが、こちらのほうは予想光度を上回ってきておりますので、もしかしたらパンスターズ彗星の尾っぽのほうに、レモン彗星がたたずんでおり、肉眼彗星のランデブーという珍しい光景が見えた時には‥‥。

今後の動向に注目したいところです。

さて彗星以外の天体にも目を向けていきましょう。

～彗星情報～

- **近地点（彗星が地球に最も近づく日）: 2013 年 3 月 5 日。**
- **近日点（彗星が太陽に最も近づく日）: 2013 年 3 月 9 日。**
- **日本からは 4 月の未明の空で目にするチャンスがあるが、高度が低い。**
- **視等級が 0 ～ -4 等級となる大彗星となる予測がある。**
- **放物線軌道のためこの彗星は見られるのは最初で最後、今回限りです。**



パンスターズ彗星の光度と太陽からの離角の変化



昇るしし座（舌状の光は黄道光）

まずは夜空を望遠鏡や双眼鏡を使わず、広い視野から眺めてみましょう！！

太陽が沈むと空にはすでに高度高くオリオン座が輝いており、東の空からはゆっくり春の星たちが登ってきます。なかでも1等星のレグルスから「？」のマークを裏返しにした形を作る星の配列になっている姿の星たちが目にとまります。これが「ししの大がま」と呼ばれています。なぜ大がまなのかというとこの部分はちょうど草を刈り取るときに使う鎌の形のように見えることから由来しているそうです。星座絵では獅子の頭から胸の部分にあたります。ななめを向きながら空を駆け上がってくる獅子の姿は、百獣の王と呼ぶにふさわしいくらいに勇ましく見えます。またレグルスはコペルニクスが名づけたといわれ、黄道上にある重要な星もあり、王の星＝王子様を意味するとされています。また獅子の胸元に輝くことから、獅子の心臓を意味するコルレオニスと言う名前もあります。



また北をみると北極星を見つけるためのツールである指極星「北斗七星＆カシオペア」が一緒に北極星を中心にして横一線に対極する姿もこの時期見ることができますので、機材を使った観望や撮影のためににらめっこするPC だけではなく、時々は大きく空を眺めてゆっくりしてもいかがでしょうか？



13㎝望遠鏡で撮影した水星

〇水星の東方最大離角（2月17日）

先ほど彗星の記事でも述べましたが、まず水星は地球の内側を公転する惑星で、一番太陽に近いため太陽から大きく離れることはないので、なかなか見れる機会（太陽に近いため、夕方か明け方のみ見える）が少ない惑星だと思います。ただこの日は太陽からもっとも東側に離れ（東方最大離角）るので、日の入り45分後で高度8度と低いですが、西の空がひらけたところで双眼鏡でなんとか確認するころができます。ちなみにこの最大離角は水星の公転周期に起因しており、年に6回おこります。これは水星の公転周期が短く、地球に近づく会合周期は115.88日と惑星の中で最も短く、1年365日の3分の1弱にあたります。地球と会合する前後で太陽から最も離れる最大離角が起こりますから、年間を通して水星は年に6回強、太陽から離れる機会があります。地動説で有名なコペルニクスでさえ見たことがなかったといわれる水星を見つけるには、この機会を逃す手はありません。

〇春の銀河（撮影ver）

春といえば、冬の星雲や星団は西に沈み、明け方に少しずつ夏の星雲・星団が見え始める時期です。短焦点の望遠鏡を所有しているかたは、この時期は撮るものないや！っては少し冬眠？休眠？時期になってくるかと思いますが、超焦点の望遠鏡を持っておられる方は、クローズアップ撮影でのハイシーズンの到来と言ったところでしょうか？

そんな春の銀河たちですが、長焦点ばかりが活躍!!ではなく、短焦点の方でも、いくつか撮影を楽しめる対象があります。

●しし座のトリオ・・・しし座の脚の付け根部分にある銀河群ですが、地球から約3000万光年の距離にあり、銀河群を形成しております。それぞれ明るさが違いますが、焦点距離500mm前後にAPSカメラを取り付けたら、M65・M66、そして紡錘型のNGC3628がひとつの構図の中にバランス良くすっぽり収まってくれます。

この3つの銀河を撮影する場合、一番暗いNGC3628に露出を合わせると、うまく撮影できるでしょう。また明るさだけでなく、色合いも微妙に異なってきますので、ぜひ処理する際にも色々楽しんでみてはいかがでしょうか？

他にもおおぐま座にあるM101（回転花火銀河）やM81&M82なども短焦点で撮影できますので、ぜひ休眠せず春の星空の撮影を楽しんではいかがでしょうか？

執筆：てつくん



しし座のトリオ（M65,M66,MGC3628）

うんちくあれこれ

第16回　宮内双眼鏡のこだわり

僕と宮内双眼鏡の出会いは約二十年前です。それまでに、ビクセンの10センチ反射望遠鏡赤道儀セットで楽しんでました。

あるとき、彗星を肉眼で発見したいと思い、反射望遠鏡で出来るかなとやってみたけど難しくて無理と感じて、いろいろ考えてみた結果、双眼鏡に至りました。

当時の天文ガイド、スカイウォッチャーを買ってきて二つのメーカーに行きあたりました。フジノンと宮内光学です。迷いました。フジノンはべらぼうに値段が高いし、性能はいいんだけど持ち運びが出来ない。

それに比べて宮内双眼鏡は値段もそこそこだし持ち運びによさそうだし、これしかないと想い購入にいたりました。

見え方が抜群で、選んでよかったです。いまだレンズも曇らず活躍しています。





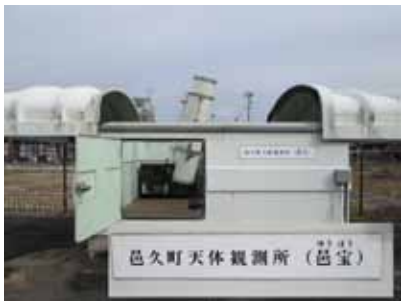
宮内双眼鏡

天体観測所「邑宝（ゆうほう）」

この観測所との出会いは13年前邑久町の広報誌でイベントがあるから参加したのがきっかけです、はじめは邑久町教育委員会主催でしたが、引き継いで僕が預かることになって今に至ってます。今は、あまり活動してません。どなたか、僕に言ってくれば、いつでも使用できますので、気軽にお問い合わせください。

因みに無料会員募集中です。

執筆：一番星







邑宝天文台

会員紹介「hawk」

会員番号 24 番の hawk です。OAC に入って早4年（だったかな？）で,「会員紹介」ということで何を書くか悩むところですが, やはりここは定番である「私の天文半生」とか「OACに入ったいきさつ」等について書いてみたいと思います。

「私の天文半生」については，話は小学校4年生くらいまで遡ります。当時，天文に特別な思い入れがあったわけでもないのですが，お小遣い欲しさに始めた新聞配達のバイトで約7ヶ月間の労働の末，当時の私は約3万数千円のバイト料を手にしました。3万数千円とは小学生にとっては大金ですが，当然, 貯金等ということは考えることもなく，プラモデルなら300個買えるな～～等と考えつつ，当時私が選んだのは「ビクセン オリオン 60mm 屈折望遠鏡（経緯台仕様）」でした。

「ビクセン」を選んだのは，親が持って帰ったカタログが「ビクセン」だけだったから。貧乏な小学生にとって，かつ周りに天文をやっている人もいない田舎の小学生でしたから，天文雑誌等の存在も，また天文界のさまざまな常識も一切知らず，カタログの中から選んだのは「倍率300倍」という華々しい数字に囲まれた 60mm 屈折望遠鏡でした。今思えば，典型的な PR 戦略にはまっていたわけです。

そして機材を組み立てて初めてみた天体は，まずは定番の「月」でした。25mm のアイピースで月の全景を見た後，6mm のアイピースでクレーターのアップを見て，2倍バローレンズなんかでも見たりします。「これが300倍か～～」等と感動しながら。。

ひととおり月を見た後は, 次は「木星」と「土星」です。木星の衛星を見て，土星の輪を見て，「まあ300 倍はこんなもの。。きっともっと高価な望遠鏡ならよく見えるだろう」と自分の望遠鏡の実力を少し知りつつ，まだまだ希望を膨らませます。

そしてここまで考えた私は，ある考えに至ります。「300倍の倍率があるのだから，星（恒星）をみたら，太陽とまではいかないにしろ，木星か土星か，もうちょっと小さいくらいには見えるんじゃないだろうか？ 何しろ，木星とか土星は，太陽の数分の一でもこれくらいに見えるのだし，少々遠くの恒星でも300倍あれば何か見えるかも知れない！！」という確信にも似た考えで想像します。愚かですね～～, 当時の私。でもきっと今小学生に同じようにせがまれたら，今でも試すことを厭わないと思います。

で，期待に胸を膨らませて，「恒星を300倍で見る」ことに小学生の私は挑戦します。何の恒星を見たかは覚えていません。きっとベガとか，そんな1等星だったと思います。



写真1 はじめて撮影したオリオン座全景
（50mm f1.4 ISO1600 5分）

期待に胸を膨らませた結果は，OACの会員の皆様ならどのようになるかご存知のとおり，アイピースを覗き込んだ私の眼の前には，「単なる1つの点」が，ポツーんとかつあっさりとありました。「ああ私の望遠鏡の能力なんてこんなものか」というかすかな挫折感と，「よく考えりゃゼロにいくらかけてもゼロじゃん。。」という，0×∞（無限大）＝0という明快な答えを味わって，当時小学生の私は天文の世界を後にします。

その後，購入した望遠鏡は家の片隅にしまい（でも捨ててはいない），20数年の時が経ちます。途中，天文雑誌を読んだことのある友人と高校時代に出会いますが，その友人も望遠鏡は持っていなかったため話も盛り上がらず，学生時代を卒業し社会人になります。

社会人になった私は，ある時書店で天文雑誌に出会い，「天文にはいくつからの楽しみ方があり，そのうち写真撮影は赤道儀等の機材は要るものの，星を長時間追尾して撮影するので，眼に見えないものでも撮影できる」ことを知ります。

「そういえば友人が赤道儀とか言ってたな～～」等と思い出し，雑誌を読むとそれなりの機材は要るものの，そこは別趣味の電気・機械工の知識があったため「これくらいの機材だったら中古品等を集めて安く製作することもできそう」というふうに考え，私の第2の天文人生に灯がつきます。

それから「安く・自作（or 改造で）」をテーマに，最初に手に入れた機材は「ミザールAR赤道儀（ヤフオクで約1万円の中古）」でした。これに「親の一眼レフカメラ（銀塩）」を借りて追加し，その他にも足らないものをいろいろ揃えて，天体写真人生がスタートします。

初めて撮ったのは，まずは難易度の低いところで，50mm カメラレンズによる「オリオン座の全景」でした。マニュアルフォーカスレンズなのでピントはとりあえず「無限大」。50mm 5 分間の露出なので赤道儀はノータッチガイドです。カメラの収差とかフィルムの感度荒れなんか知ったこっちゃなく，こちとらとにかく「目で見えない星がどこまで写るか」が知りたいのですから，レンズは絞り f1.4 開放，フィルムは ISO1600 で攻めます。そして初撮影のオリオン座。出来上がった写真を見て驚きました。「こんなに星が写るのか！ 空にはこんなに星があったのか！ 色だって，白からオレンジまで色様々！ オリオン座の星雲（M42）まで写っとる！」と。もう「天文趣味は撮影に決まり！」と，撮影路線を歩むことを確信した瞬間でした。

その後，撮影機材はご多聞に漏れず,「長焦点化」への道を歩みます。そりゃ,「50mm でこれだけ写るんだから，天文雑誌に載ってるような巨大な望遠鏡を使ったらどんなになるのか？？」と思うのは当然ですよね。

「長焦点化」で避けて通れないのが,「赤道儀のガイドエラーに対する対策」, つまり「半自動ガイド」もしくは「自動ガイド（オートガイド）」を行うことです。工作には自信がありましたら，どちらも「何とかなる」と思いつつ，まずは手軽な「半自動ガイド」から始めます。赤道儀に撮影鏡とガイド鏡の2本を載せ，すでに AR-1 赤道儀にはオーバーウェイトでは？？と思いつつ，ガイドアイピースを覗き込みます。ガイド星の動きを見ながら，慣れてくるとガイド星の動く方向を予想しながら, まるで「インベーダーゲーム」等のテレビゲームのような感じでコントローラのボタンを連打し，ガイド星をアイピース中心に抑え込みます。この「半自動ガイド」は，本当にテレビゲームのようで楽しかったです。が，やはりいかんせん撮影を始めるとガイドに集中せねばならず,「もっと楽な撮影がしたい」と思うようになり,

これまたご多聞にもれず，「オートガイド」の道に入ります。

オートガイドは，当時，インターネットで流行っていた「Web カメラを利用した安価なオートガイド」を使用しました。システムは特に大きなきな問題もなく完成したのですが，この頃から「何か自分のとった写真って，ピントもきちんと合ってないし，ガイドも流れてる部分もあるし，もうちょっときれいな写真を撮りたい」と思い始めますが，このあたりから私の「天体写真人生受難の時」が始まります。これまたご多聞に漏れず，具体的には

・どうにもピントがばっちり合わない。（もちろんピント合わせ治具等も使用していない）
・ガイドエラーがある。（まあ AR-1赤道儀に，望遠鏡2台というのも無理な構成）

というような問題で，さらに私の場合は

・そもそも機材に自作 or 中古改造前提なので，どこかをグレードアップするにも，自作 or 改造に時間がかかり，非効率的

という要素が拍車をかけます。

結果，「満足のいく写真が撮れない時期」が長く続き，「天体撮影という趣味を一人で行うことの限界」や，「天文には，他の楽しみ方（たとえば眼視等）もあるのではないか」ということを思うようになります。

そんなことも感じながら，各地の星まつり等の人の集まるイベントを巡っていたのですが，ある時，おそらくは日本中の天文工作好き・双眼好きの人が集まる祭典「双望会」というイベントに行きました。

「双望会」は，毎年，愛知県の山奥で開かれる星まつりですが，他の星まつりが「当日飛び入りの一般参加可能（つまり，内容も家族向けのものが多い）」のに対し，「集まった人同士の交流を重視する，予約制のスターパーティ（星を実際に見て楽しむパーティ）」です。「予約制」ということで敷居も高く感じるのですが，そこはそれ「敷居が高い = 猛者どもが集まる = 有意義な交流が可能」と解釈します。そして「双望会」から帰るといつも間にか，「双眼病」（望遠鏡は双眼視でなくてはいけないという考えの病気）に感染している自分がいました。そして，「双望会」から帰って2週間後，「双望会のフリーマーケット」ではお流れになり，「興味のある方は後日問い合わせてください。」となっていた15cm双眼望遠鏡に対し，「まだ売れてませんか？」と問い合わせている自分がいました。



現在使用中の機材（150LD-BINO）

その後，その時問い合わせた15cm双眼望遠鏡を無事手に入れ，「これで眼視ができる！」と意気揚々としていた私に次の課題が舞い込みます。望遠鏡は手に入れたのですが，肝心の「見るべき天体は空のどこにあるのか？」です。ここで従来の私であれば，「そんなものは星図を見るか，もしくは大きなファインダーをつけて自分で探す！」と言うところですが，すでに写真撮影で一人で苦渋を味わってきた私は，「ここはやはり誰かに教えてもらう（ = 社会人クラブに入る）ことが最善」と判断し，かくして私はOACの門を叩くことになります。



ミザール AR-1 赤道儀（モータードライブ改造したもの）

ここまでで「私の天文半生（反省？）」は概ね終了です。OACに入ってからは，当初の目標であった「眼視の腕を磨く」ことは一向に上達せず，未だに天体導入時には「T＃さ〜ん」とか，「イノウエちゃ〜ん，何か入れて〜〜」等と他人まかせですが，そのうち上達しようかと考えております。

ＯＡＣに入って，また眼視を始めて良かったのは，以前の写真撮影に比べて，機材の設置・撤収に時間がかからないので時間に余裕があり，その分，皆さんと楽しい話ができることです。やはり人生何事も，「趣味は余裕のある世界でやることが重要」ですね〜。まあ「あえて余裕のない世界に突入しドロ沼にはまり込むのも時には重要」と思いますが，そこはそれ，適宜判断で。

そんなわけで広島在住と少し遠方なので，集まりに毎回参加するほどタイムリーには参加できないのですが，その分時折参加する観望会は，「毎回が星まつり」のように新鮮で，私にとっては「気の合う仲間と楽しく話せる，なくてはならない場所」です。また今後もいろいろとご迷惑をおかけすると思いますが，皆様よろしくお願いします。

執筆：hawk

■特別企画「天文川柳」

お正月気分も早々に去ってしまったことを思い起こす1月後半、何を思ったのか当クラブのメーリングリストを通じて「天文川柳」を募集してみました。テーマはただ一つ「天文を趣味にしている者が共感を覚える」ことです。

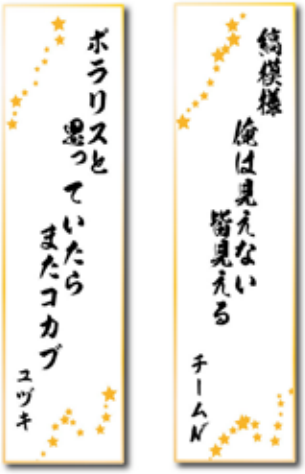
この募集、一人暴走の企画倒れになるかと思いきや、多数の会員さんから合計120を超える川柳が集まりました。川柳といえば、５・７・５の定型詩。季節がら冬物が多いですが、様々なジャンルの楽しい川柳が届きました。

今日はそんな中から独断と偏見で選び抜いた天文川柳を、勝手にジャンル分けしてご紹介します。
解説や論評はくどくど行いませんが、全てを読み解けたあなたは立派な天文屋で間違いなしです。
では、始めましょう。



▼観望編

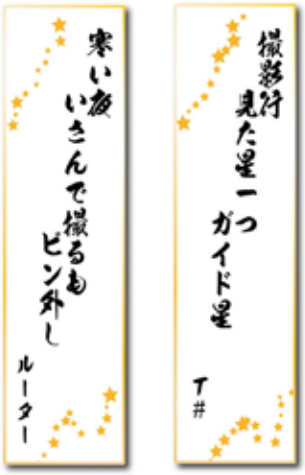
天体観望、こんなこと身に覚えありませんか？



▼撮影編

天体撮影も現地・アフターなかなか苦行です。





▼機材編

天文機材とは永遠に戦い続けなければなりません。



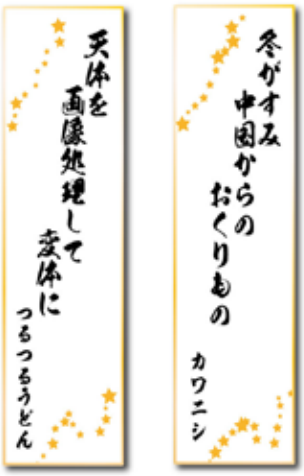
▼一笑編

出来が良すぎて笑えます。



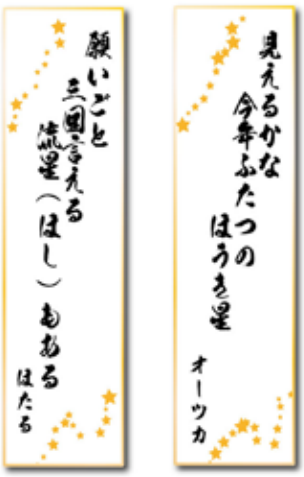
▼混乱編

どうしたものか？と頭を悩ますことも多いです。



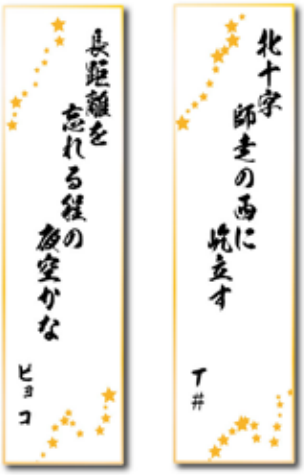
▼星空編

天文イベントは期待している時が楽しみマックス。期待どおりで幸せマックスです。



▼情景編

わかりますか？このときの情景と想い。



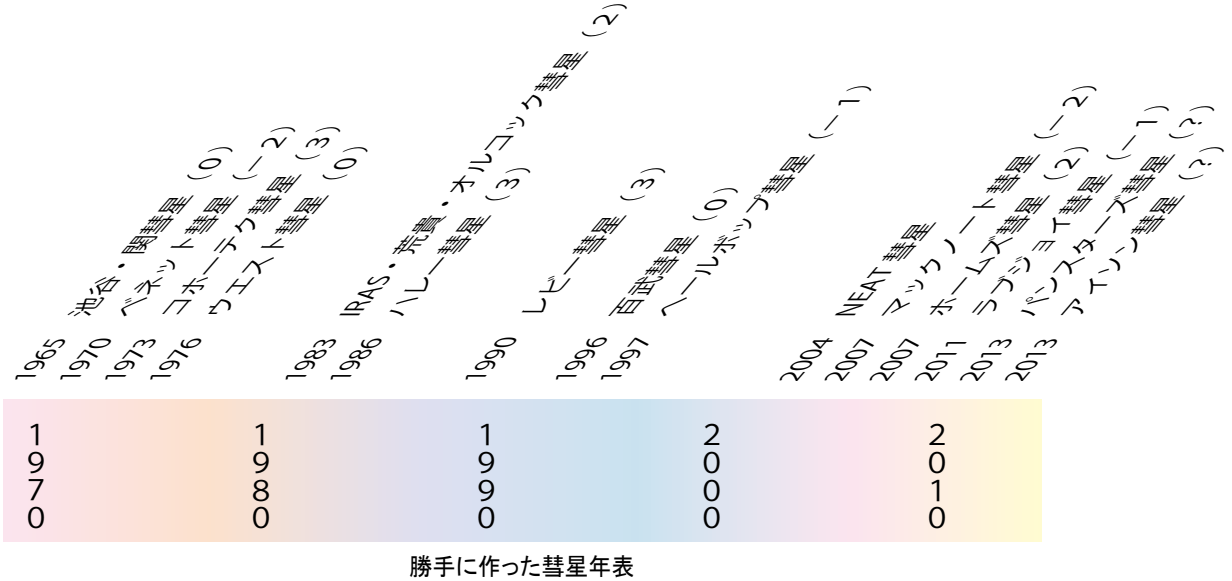
以上で紹介は終わりです。
ご紹介できなかった川柳には、素晴らしいものがまだまだありますが、誌面の都合上ご勘弁くださいね。
今回の天文川柳をとおして、普段あまり口に出して語らずとも、同じ経験や想いをシェアできていることに少し喜びを感じました。
では、今回ご紹介した川柳、ご褒美として次回定例観望会にて、投稿者本人さんから大声で詠みあげてもらいましょう（笑）

執筆：Sirius
協力：会員の皆さん

■投稿

大彗星を見てみたい

こんばんは。T# です。
今年は、今号の天体ガイドでてつくんさんもかかれておりますが、大彗星になるかもしれないという二つの彗星が見えます。
そこで、自分も夜空を見るようになってしばらく経つので、少し見てきた彗星を振り返ってみたいと思います。しばしおつきあい下さい。
自分が望遠鏡を買って星を見るようになったのはまだ中学生だった 70 年代末のこと。天文入門書などに載っていた大彗星たちの写真を見て、胸躍らせたものでした。池谷・関、ベネット、コホウテク、そしてウエスト彗星。どの彗星も素晴らしい姿で、いつかは自分もそんな大彗星をこの目で見てみたい、そう固く心に誓ったのでした。（見つけたいと思わないところがミソ）
その当時は、まだ肉眼捜索にて彗星が発見できる、今から思えばのどかな時代でした。倉敷天文台の本田さんや津山の多胡さんをはじめとしたコメットハンターという人たちが毎夕毎朝彗星を求めて探していたのです。現代では、人間の代わりに機械の目で探しています。パンスターズもアイソンもその成果です。
話は戻り、彗星に興味を持ったものの、中学高校時代と肉眼彗星はあらわれませんでした。そうなると、1986 年春に回帰するハレー彗星に期待が高まります。
しかしその前、大学生になった 1983 年の春、初の肉眼彗星を見ることができました。IRAS－荒貴－オルコック彗星です。5 月の連休に明るくなり、一週間のうちに北から南へ駆け抜けていきました。形は最初から最後までコマだけのヒトダマ状でしたが、初めての肉眼彗星、とても感動しました。動きがとても速かったのも驚きでした。
さて、時は流れて 1985 年。ハレー彗星が 6 等級まで明るくなって自分たちの望遠鏡でも見たり撮ったり出来るようになりました。20 ㎝のドブソニアンで初めて見たときはようやく見えたという感慨を覚えました。ハレー彗星は、1986 年の正月ごろ太陽に近づいたのち、3 月下旬から日本でも見え始めました。この頃には、ハレー彗星バブルとでも言うべき現象が起こり、週末の山や暗いところは彗星目当ての人々が殺到、大変な状態になっておりました。しかし…。肝心の最接近した 4 月上旬には南天低く、これまたヒトダマ状の姿が見えただけでした。そしてシッポの角度が悪く、3 月下旬の方が彗星らしい姿だったというオチになりました。一応肉眼彗星にはなったものの、前評判と現実の落差に何か釈然としないものが残った回帰でした。結局 1980 年代は彗星不作の時代だったようです。
そののち、岡山に帰ってしばらく経った頃、ようやく確実な大彗星の話を聞きます。1995 年ヘール・ボップ彗星です。1997 年の近日点通過の時には確実に明るくなって肉眼等級になるというふれこみでした。しかし、その前にまさに彗星の如く出現したのが、百武彗星です。1996 年 3 月初旬にそれなりの明るさでしたが、予測では下旬に地球に大きく近づいて大彗星になるとか。これまでさんざんガッカリしてきた身としてはうのみには出来ませんでしたが、でもちょっぴり期待していました。最接近前に晴れた 3 月 22 日、勇んで加茂川町に向かいます。相当明るくなっているらしく、途中の車内からでもぼーっとした姿が見て取れます。到着して見上げたその時、ショックを受けました。うしかい座のあたりに 20 度ほどの明るいシッポが見えるのです。初めての体験でした。その日は一晩、シッポのある百武彗星を飽きずに眺めてお



勝手に作った彗星年表



南中する百武彗星

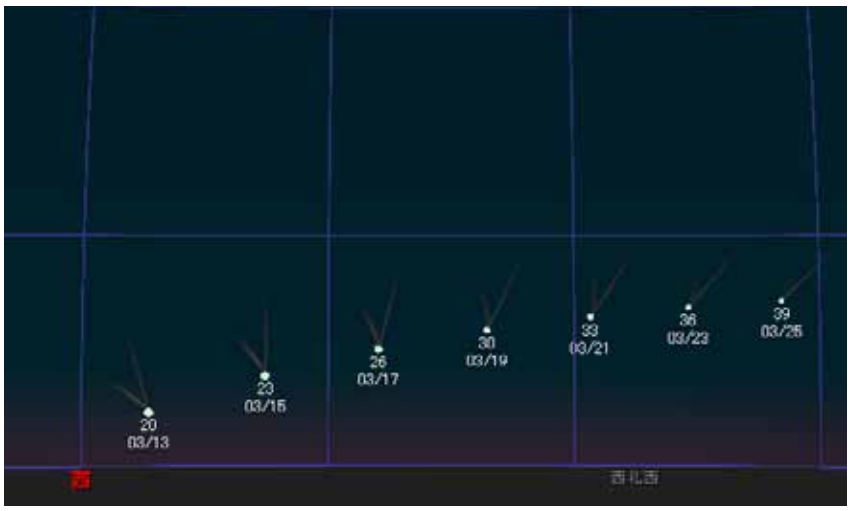
りました。

こうなると、最接近の日が平日であろうと見に行きたくなるのが人情というもの。最接近日の25日、22時頃家を出発、23時頃大芦高原に到着すると、北斗七星の北側に頭が、そしておおぐまかみのけおとめを横断してほぼからす座に到達する長さ90度に達するシッポを見せる百武彗星がそこにはおりました。翌日仕事だったので、午前1時頃には帰りましたが、それでも未だに忘れられないすごい光景でした。百武彗星は、その後急速に暗くなりましたが、翌年には、もう一つの大彗星ヘール・ボップ彗星が明るくなりました。

この彗星は、1997年2月初旬の満月下でも割と立派な見え方をしており、3月にはいると日本のシッポをはやした



ヘール・ボップ彗星



3月下旬のパンスターズ彗星の見え方（ステラナビゲータ9で作成）

堂々たる大彗星の風格を備えてきました。色々考えた末、近日点通過前の夜明けがベストだろうと、3月中旬の水曜日未明に撮影に出掛けました。そして撮ったのがこの写真。二本に分かれたV字状の姿で東の地平線から出てきたのを今でも覚えています。

これまた忘れられない光景です。

そのあと、夕空に回っても明るく輝き続け、夏頃までは肉眼で見えていました。夕空にぼやっと光る曲がったシッポ、魔女のホウキとはこのことかとも勝手に思いながら、眺めておりました。

この二つの彗星は、今でも自分の中では両横綱です。

その後、2000年代には、肉眼彗星はいくらか出現したものの、90年代の両横綱には到底かなわない見栄えでした。2007年マックノート彗星は、すごかったらしいのですが、残念ながら最盛期は南半球。その勇姿を見ることがかないませんでした。それでも、夕焼けの中、手持ちで写るくらいに明るかったのは、大彗星の風格を片鱗なりとも魅せてくれました。



近年出現した肉眼彗星たち

左上：ニート彗星（2004） 右上：ホームズ彗星（2007） 左下：マックホルツ彗星（2005）
右下：夕暮れの中輝くマックノート彗星

「10年間には大彗星が二つは出現する」という彗星にまつわるジンクスを聞いたことがあります。1990年代は間違いなく百武・ヘールボップ、2000年代はマックノート、さて、2010年代は、と思えば、一昨年のラブジョイ彗星は間違いなく大彗星に入れていいでしょう。パンスターズ彗星は光度予報が下方修正されたようですが、アイソン彗星は順調のようです。彗星は汚れた雪だるま、まさに水物ですので楽しみにしたいと思います。願わくば、肉眼大彗星が再び見えますように！

執筆：T#

発行元：岡山アストロクラブ
発行日：平成25年2月20日
執筆：
「天体ガイド」 てつくん
「うんちくあれこれ」一番星
「会員紹介」hawk
編集：T#
次号発行予定：平成２５年５月
執筆予定：
・天体ガイド　ノッポのキリン
・うんちくあれこれ　ユヅキ
・会員紹介　kishimoto
編集人より
まだまだ寒く、その割にはスッキリした星空が見えない日々が続きます。いよいよ３月、パンスターズ彗星明るくなって欲しいですね。
ホームページアドレス
http://oac.d2.r-cms.jp/